

街並み生い立ち 街歩き

— 港町横浜と佐世保

都市デザイナー

西脇 敏夫

〈横浜編〉

「街並み生い立ち 街歩き」
執筆テーマ

- ① 街並みの生い立ちを歩く
〈横浜編〉
- ② 大通り公園
- ③ 都心プロムナード
- ④ くすのき広場と横浜市庁舎
- ⑤ 横浜公園と日本大通り
- ⑥ 日本大通りの建物たち
- ⑦ 開港広場
- ⑧ 山下公園通り
- ⑨ 横浜人形の家
- ⑩ 元町・中華街、馬車道、伊勢佐木町
- ⑪ 港の見える丘公園周辺
- ⑫ 外国人墓地、元町公園周辺
- ⑬ 山手公園、イタリア山庭園周辺
- ⑭ 歴史を生かしたまちづくり
〈佐世保編〉
- ⑮ 佐世保の街づくり
- ⑯ コンパクトシティ佐世保
- ⑰ 三ヶ町四ヶ町商店街
- ⑱ 心やさしい海辺のまち
(テーマは予定です。変更となる場合もあります)

12. 「外国人墓地」 「元町公園」周辺

アメリカ山公園

「ブラフ99ガーデン」の角を曲がり、「横浜地方气象台」と「外国人墓地」の間を「元町商店街」方面に行くと、正面に「アメリカ山公園」があります。門の手前には「見尻坂」の階段があり「元町商店街」につながっていますが(写真1)、この「アメリカ山公園」が開園してからは、公園内からエレベーターとエスカレーターを利用して「元町・中華街駅」や「元町商店街」に行けるようになりました(写真2)。公園の一部が「みなとみらい線元町・中華街駅」の上に増築をした建物の屋上にあるからです(写真3)。



写真1 アメリカ山公園。門の手前左が見尻坂



写真2 右手の園路突き当りが元町・中華街駅出入口



写真3 元町商店街にある元町・中華街駅出入口

この立体施設は、1982(昭和57)年に横浜市が策定した「山手地区基本構想調査」の中で構想されました。その後、2004(平成16)年に開通した「元町・中華街駅」(写真4)の設計に際しても、将来の増築の可能性が織り込まれていました。



写真4 駅舎のある手前のビルの屋上と公園がつながる

そして構想から27年後の2009(平成21)年に、「都市公園法」に新設されたばかりの「立体都市公園制度」を活用し、横浜開港150周年の関連事業として実現することになったのです。

「山手地区」が外国人居留地として開放された際、ここがアメリカ公使館予定地だったことと、戦後アメリカ軍に接収され米軍住宅が建てられていたことによって「アメリカ山」と命名されています。

この施設の誕生によって、徒歩で「山手地区」を訪れる人にとって利便性の高い新しい玄関口になりました。

岩崎博物館(ゲーテ座記念)

この建物がある場所は、1885(明治18)年に建てられた日本で初めてシェークスピア劇を上演した「ゲーテ座」があったところです。「ゲーテ座」の収容人員は350人で外国人が主体の観客とともに、後に日本文化に影響を与える著名な日本人達も通ったそうです。しかし関東震災で崩壊し正確な資料もありませんで

したが、1980(昭和55)年に岩崎学園により現在の博物館が建てられ、服飾関係の展示品や「ゲーテ座」の資料などが収められています(写真5)。



写真5 岩崎博物館

横浜地方気象台

横浜地方気象台は当初、「関内地区」にありましたが関東大震災で被災し、1927(昭和2)年に現在地に建設されました。現在は新しく事務棟が増築されて、この建物は一般公開されています(写真6)。



写真6 横浜地方気象台

外国人墓地

「外国人墓地」というエキゾチックな雰囲気と、「山手本通り」に面して唯一、高い樹木や建物に遮られずに大きく開けた風景を見渡せる場所であり、「山手地区」のシンボルゾーンの一つになっています(写真7)。

1854(安政元)年にペリーが7隻の艦隊で来日した際、ミシシッピー号の水兵が墜死し、その埋葬地とアメリカ人用の墓地を海の見える地にと要求されました。そして幕府が横浜村の「増徳院」の境内の一部を提供



写真7 山手本通りと外国人墓地

したのが「外国人墓地」の始まりといわれています。その後日本で亡くなる外国人も増え、「外国人墓地」が拡張されるようになり、関東大震災の後には「増徳院」が移転して現在の墓域となったようです。

花崗岩で作られている正門と門柱はモーガンの設計で、脇に資料館があります。

山手資料館

「山手資料館」は「外国人墓地」の向かい側に立つ、緑色のドイツ下見貼りの外壁とオレンジ色のフランス瓦の建物です。1909(明治42)年、本牧一丁目に中沢邸として建てられ、その後山手諏訪町の園田邸内に移築された後、1977(昭和52)年に現在地に移築され、資料館として公開されています(写真8)。

隣には昭和42年にオープンしたピアガーデン「山手十番館」があり、共に山手らしい風景として馴染んでいます。



写真8 山手資料館

横浜山手聖公会

1931(昭和6)年にモーガンの設計による、城砦風の鐘塔と大谷石貼りの重厚な外壁に特徴があります。関東大震災前は、コンドルの設計による隅部に尖塔のあるレンガ造の建物だったそうです。火災などにより数度に亘り修復が行われています(写真9)。



写真9 横浜山手聖公会

元町公園

桜の名所としても知られている「元町公園」は「山手本通り」に面し、隣接する「外国人墓地」とともに谷戸の地形に立地しており、周辺一体がまとまった緑地を形成しています。この付近は明治の初めにフランス人実業家ジェラル드가、湧き出る良質の天然水を居留民や船舶に供給していたところで、当時は水屋敷と呼ばれていました。また西洋瓦とレンガの製造も行なっていましたが、関東大震災の後、横浜市が公園として整備して1930(昭和5)年に開園しています。

現在では山手本通りに面した斜面の上の部分に、歴史的建造物である「エリスマン邸」が移築され、道路を挟んで隣接する「山手234番館」や「ベリックホール」の敷地も新たに公園に含まれました(写真10)。

斜面の下部分は木々に被われた斜面に囲まれたプールや弓道場があります。さらにその元町商店街側は、

コラム

山手地区の歴史(その2)

「山手地区」には娯楽施設、ホテル、図書館、各国公使館領事館、警察署、消防署などの施設が整備されただけでなく、ビール醸造所(コーブランドの「スプリング・パレー・ブルワリー」、後の「ジャパン・ブルワリー」を経て「麒麟麦酒」)、「ジェラルワ煉瓦石製造所」、「横浜製水会社」等の工場も立地していました。

1899(明治32)年に居留地制度が撤廃されましたが、その後もこうした山手の全盛時代は続きました。

1921(大正10)年、都市計画法を受けて横浜の都市計画区域が確定し、「山手地区」の大部分が住居地域、谷筋の道路沿いが商業

地域となりました。しかし1923(大正12)年の関東大震災により、洋館をはじめ建築物のほとんどが倒壊・焼失してしまっただけです。

関東大震災をきっかけに、母国に引き揚げたり、神戸に移る外国人が続出し、山手外国人社会の復興は容易ではありませんでした。横浜市は、外国人の引き戻しを積極的に推進するとともに、一方で外国人の永代借地権の回収も図りました。山手に市営の外国人住宅も建設しています。1930(昭和5)年には、「ジェラルワ煉瓦石製造所」跡地とその周辺が「元町公園」として、1937(昭和12)年には「スプリング・パレー・ブルワリー」ゆ

かりの地が「麒麟園」として開園しました。

こうした震災復興により、西洋館と丘の緑が調和するエキゾチックな景観が再び形成され、1941(昭和16)年には「風致地区」に指定されています。しかし、往時の外国人社会が徐々に回復されてきた頃に第二次世界大戦を迎えましたが、「山手地区」は谷筋を除いて戦災を免がれており、洋館なども残りました。

戦後は主要な施設が米軍により接収され、全てが解除されるのに1972(昭和47)年までかかりました。1962(昭和37)年に、開港時の英・仏両軍駐屯地跡が「港の見える丘公園」として開園、「外人墓地」を含めたこの周辺一帯には、市内外から大勢の人々が訪れるようになりました。



写真 10 元町公園

平成10年度から12年度にかけてリニューアル整備が行われ「ウォーターガーデン」として湧水を利用した壁泉やカスケードが設けられました。

エリスマン邸

「山手本通り」に面して豊かな公園の緑を背景に、白い外壁のモダンな雰囲気をもった洋館です。関東大震災後の1926(大正15)年に、山手の

別の場所にスイス人貿易商エリスマンの私邸として建てられていた建物で、レーモンドが設計しています。戦災は免れましたが、マンション事業により解体されかけるところを横浜市がその部材を引き取り、1989(平成元)年に現在の地に移築復元して公開されています(写真11)。



写真 11 エリスマン邸

ブラフ80メモリアルテラス (山手80番館遺跡)

「エリスマン邸」の脇の園路を少し下りた斜面にある遺跡です。関東大震災で倒壊したレンガ造りの洋館の地下部分で、1984(昭和59)年に「元町公園」の園路整備を行っていた時に発見され、発掘されました。「山手80番館マクガワン邸」の建物と考えられ、そのまま保存され「ブラフ80



写真 12 ブラフ80メモリアルテラス

メモリアルテラス」として公開され、園路や見学用のデッキが整備されています(写真12)。

山手234番館

「エリスマン邸」の「山手本通り」を挟んだ反対側にあり、1927(昭和2)年に建てられた外国人向け民間集合住宅として貴重な建物です。関東大震災により横浜を離れた外国人に戻ってもらうための復興事業の一つとして建てられました。4戸の共同住宅で中央の玄関ポーチを挟んで上下左右同形の3LDKの住戸が対称形で配置されています(写真13)。



写真13 山手234番館

戦後は米軍による接収を経て、1980(昭和55)年頃までアパートメントとして使用されていました。その後取壊されるところを、1989(平成元)年に横浜市が歴史的景観の保全のために取得し、「元町公園」の一部として保全改修を行い、1999(平成11)年から一般公開されています。

ベーリックホール

「エリスマン邸」の西側の細い道路を挟んで立っている建物で、戦前の西洋館としては最も規模が大きく、スパニッシュスタイルを基調とした建築的な内容が充実したものとされています。英国人貿易商のベーリック邸で、モーガンによって設計されました。戦後は「セントジョセフ・インターナショナル・スクール」に寄贈され「ベーリックホール」として

寄宿舎に使われていました。スクールの閉校にともなって横浜市が取得して整備し、「元町公園」の一部として2002(平成14)年に公開されています(写真14)。



写真14 ベーリックホール

セントジョセフ・インターナショナル・スクール跡の小公園

「ベーリックホール」の斜め前に小さな公園があります。ここには1901(明治34)年より長いこと「セントジョセフ・インターナショナル・スクール」があり震災前後に建てられた校舎もありましたが、2000(平成12)年に閉校となり、現在はマンションになっています。スクールの跡地の一部につくられたこの小公園は「元町公園」の一部になっています(写真15)。



写真15 スクール跡地の小公園

山手89-6番館(えの木てい)

「元町公園」の向かいにあり、外国人向け住宅としてこの一帯に同じタイプの住宅が数棟建てられたようですが、完全な姿で残っているのはこの建物だけです。隣の「山手234番館」と同じ設計者です。

この建物を買取り住んでいたオーナー夫人は、ケーキや料理づくりが大好きで、洋館を見に来る人などを時折おもてなしをしていたそうです。そして1979(昭和54)年に、一階の暖炉のあるリビングをカフェとしてオープンしたのが始まりで、ゆったりした前庭とともに喫茶店として利用されています(写真16)。



写真16 山手89-6番館

今回は「山手公園」から「イタリア山庭園」周辺を歩きます。

〈参考文献〉

1. 「港町・横浜の都市形成史」(編集発行: 横浜市企画調整局)
2. 「都市の記憶—横浜の近代建築(II)」(企画: 横浜市都市計画局都市デザイン室 発行: 横浜市歴史的資産調査会)
3. 「SD 都市デザイン—横浜 その発想と展開」(編集: SD編集部 発行: 鹿島出版会)

にしわき・としお

早稲田大学・同大学院建築学科で学んだ後、大高建築設計事務所、武建築計画研究所で多摩NT計画、港北NT計画、再開発計画、観光開発計画、建築設計などに携わった。

36歳の時(1976年)、横浜市役所にアーバンデザイン担当主査として招聘される。都市デザイン室長、都市企画部長、都心部整備部長などを歴任し、「関内地区」「山手地区」「横浜駅周辺地区」「みなとみらい21地区」「金沢シーサイドタウン地区」「港北ニュータウン地区」「市民まちづくり」「歴史を生かしたまちづくり」「水と緑のまちづくり」「ライトアップなど都市空間演出」「デザイン都市横浜に向けた活動」等々、22年半に亘り横浜市の街づくりに携わり、都市デザインの具体的な実践活動を展開した。

59歳の時(1999年)、佐世保市役所に佐世保市理事(都市デザイン担当)として招聘され、7年間、海と緑に抱かれた心優しい街の都市デザインに取り組む。

首都圏と地方との二つの自治体、コンサルタント、事業者など、異なる立場から都市や建築に関わり、都市デザインを実践してきた。様々な公的委員や大学非常勤講師を歴任。講演、論文、著書、活動成果に対する受賞などがある。